帰国報告

赴任校：マレーシア　ペナン日本人学校

斜里町立斜里中学校
教諭　青山　夕輝

はじめに

機会に恵まれ、赴任させていただいたマレーシア、ペナン日本人学校で体験させていただいたことを中心に報告させていただきます。どのような環境なのか、という現地や赴任校の概要にあわせて、教科の視点からマレーシアにおける言語教育について学ばせていただいたことの一部を報告させていただきます。

１　赴任地および赴任校の概要

①赴任地マレーシア　ペナン島について

ペナン島は隣国シンガポールと並び、多民族、他文化の国家として知られているところであります。暖かく、住みよいところなので、退職後のセカンドライフを過ごすところとして日本でも人気があるようです。時間をかけ、さまざまな国から人とともに言語や文化が渡来したことで、本来イスラム国家であるマレーシアではありますが、ペナンではインドや中国、そして時折日本の文化も垣間見ることができます。町を歩いているとマレー語のアルファベット表記と漢字の看板で、ふとするとコーランが流れてきます。宗教も様々で、年に幾度も正月を祝うのも大きな特徴です。

気候としては、東南アジアということもあり、一年を通して 30 度前後の日が続く熱帯雨林気候であり、北海道の感覚からすると猛暑の夏が続くため、季節感が全く感じられない赴任１年目となりました。

しかしながら、日本を感じるための環境はととのっており、ペナンには日本の文化、物資が思った以上にたくさん入ってきています。例えば、毎年数万人が集まるペナンの大行事「盆踊りフェスティバル」があったり、ショッピングセンターでは日本食フェアが開かれたりしています。また、ダイソーやＡＥＯＮなどもあり、日本人にとって非常に住みよい環境となっています。

②ペナン日本人学校について

小学部、中学部があり、総勢 100 名余りの生徒たちが学んでいます。職員も子どもたちも日本人は主にコンドミニアムに住んでおり、毎朝 7 台のスクールバスで登校してきます。朝 7 時になるとバスの出迎えから私たちの一日が始まります。子どもたちは、日本の企業の子供たちや現地の親を持つ子供たちなどさまざまな子供たちがともに学べる暖かな雰囲気があります。また、小学生と中学生がともに遊んだり、運動会やペスタ・ブンガラヤ（学校祭）などの行事の中でも一緒に活動したりする機会があるのもペナン日本人学校ならではの特徴だと思います。縦割り活動を通して、中学生はリーダーとして学び、小学生は先輩たちに習って、良さを身につけることができるという良さがあります。

また、小学部から中学部までそれぞれ現地校との交流学習があり、ローカルスクールやインターナショナルスクールの生徒たちと交流していました。主に私がいた中学部の内容となりますが、学習は年ごとに招待と訪問の２通りの形式がありました。学校に招待する場合には、日本の遊びや文化を体験できるコーナーを用意して、そのおもしろさや特徴を知ってもらい、カードなどを交換しながら互いに簡単な英語を使って会話する場面もあり、照れたり緊張したりしながらも交流を楽しむ様子が見られました。訪問した場合は、逆に現地の結婚式を体験させてもらうこともありました。

昨年は日本の学校との交流学習も行い、小学部の生徒がインターネットを通して、北海道の学校とリアルタイムに対話し、お互いの地域や学校の特徴について発表し合いました。交流する中でお互いに驚きや発見の声を上げながら、有意義な交流となりました。

２　赴任地で学んだことから　～マレーシアの言語教育について

私たち日本人がペナンで主に使う言葉といえば、英語です。現地ではマレー語、広東語などが主に使われていますが、英語で意思疎通を図るのがほとんどでした。また、自分自身が英語の専科ということもあり、現地の言語教育から自分が学んだことについて触れたいと思います。在任中 2 校の学校を訪問しましたが、そのことについて書かせていただきます。

ご存じの通り、マレーシアはマレー系、チャイニーズ系、インド系など様々な国の文化や言語を併せもった、まさに言語と文化の集合体であり、多民族国家です。ここペナン島でも日常生活で英語を使ってコミュニケーションをとることが出来ますが、ペナンの人たちの全てが英語を使えるわけではありません。かつてマレーシア教育省は、国民の英語力の育成を掲げ、英語という教科以外に、数学・理科を英語で教えるという政策をとっていましたが、政権が変わることで事情も変わり、今では母国語のマレー語を重視する姿勢をとっています。

必修言語教科として、現在ではマレー語と英語となっています。小学校からマレー語と英語を学習しますが、教授言語は学校によって異なっていて、マレー語で教授する学校、中国語で教授する学校、タミル語で享受する学校があります。しかし、中国系、タミル系は小学校までしかないので、中学校以降はマレー語が主体となる学校で学ぶか、中華系であれば華中と呼ばれる中国語主体の学校へ進学することになります。必修教科のマレー語があるものの、学校ごとに３つの教授言語をもつということは、日本と大きく異なっていると言えます。しかしながら、英語を重要視する考えは日本と変わらず持っているため、マレーシアの英語教育の在り方を見ることによって、今後の英語教育について学ぶことができるのではないかと考えました。また、英語と合わせて、日本語などそのほかの外国語がどのように教えられているのかをみることも有効であろうと考えて、現地のインターナショナル校と現地の小学校を訪問してみました。

①Uplands International School を訪問して

（１）　他民族の生徒が通うインターナショナルスクールの現状

アップランズインターナショナルスクールは、ペナンにあるインターナショナルスクールの中でも名前が良く知られている学校で、勉学に適した良い環境・施設に恵まれていて、寮も完備されています。児童生徒や職員は国際色豊かで、欧米やアジアのさまざまな国籍者から構成されています。主な教授言語は英語でなされますが、英語を母語としない外国人のために、特別なコース（ESL）があり、集中的に英語が学習できるシステムもあります。この授業の観察を通して、異なる背景と実力の生徒に対してどのような配慮がされているかを調査しようと考えましたが、スケジュールが上手くとれず、ESL の授業は見ることができませんでした。本校は英語という教科の学習をするというよりも、「英語で」学習する学校なので、この学校では「外国語」として扱われる「日本語」の授業の様子を通して、日本語を国語としない生徒たちがどのように学習し、外国語を習得しているのかを見せてもらうことにしました。日本語の授業を行うクラス自体は能力別に分けられた 6 人程度の少人数クラスで構成されており、自分の実力に合わせて学習をすることができます。また、指導は日本人が担当していました。

（２）　目、耳をふんだんに利用した活動

この学校は非常に施設設備の整っており、どの教室でも必要に応じてプロジェクターや音楽プレイヤーをさしたる準備も要さず授業で使うことが出来ます。その利点を生かして、プロジェクターで映した絵をヒントに、事前に学習したボキャブラリーを思い出させる活

動を行っていました。絵が日本語の音声のヒントになっているクイズを通して、学習者の記憶を最大限に引き出す工夫がなされていました。基礎のクラスだったので、指導は基本的に英語で行われていましたが、答えを確認する際にはできるだけ日本語を使用して対話するよう努め、インタラクティブに活動が行われていました。生徒が活動にひきつけられていく様子を見て、この活動自体にチャレンジする要素も入っていながらも、画像や教師のヒントがあり、学習したことを思い出しやすく、誰もが参加しやすいということが生徒の学習意欲を高めているとわかりました。

（３）　絵から音声を身近にしていく工夫

日本語の文字や音声は学習する生徒にとって非常に特殊なもので、なかなか発音が定着しないと言うことを指導者はおっしゃっていました。そのため、特に基礎的なクラスであるこのクラスでは、必ず授業の始めに絵を利用して音声を何度も練習する時間を取るということでした。使用される絵は実際に発音する日本語の音声と非常に強いつながりを持っているものであり、生徒にとってわかりやすい工夫がされていました。

例）数字の学習

１（いち）→絵は itchy「かゆい」の様子を表す絵になっている

３（さん）→絵は sun「太陽」　　など

②現地小学校　Francis Light 校を訪問して

（１）現地小学校の英語教育の現状

フランシス・ライト校は、現地校の中でもエリート校に属していて、優秀な生徒を輩出する有名校です。英語は必修教科で、マレーシアのネイティブの教師が教えています。クラスは習熟度別にはなっておらず、ホームルームのクラスでそのまま学習する形態をとっていました。

今回は 30 名強の 5 年生のクラスの授業をもとに、マレーシアではどのような授業が行われて、生徒がどのように英語を身につけているのかを見せていただきました。

（２）精選されたシンプルな授業と対話型の授業形態

一時間の授業を通して、形容詞の比較・最上級をテーマに授業を教師が主体となって問答形式で進めていました。テーマは至ってシンプルで、わかりやすい授業でした。形容詞の比較を使って、教室内のものや友人について言い表すということをくり返しながら、形容詞の比較変化の復習をしていました。教科書やプリントを使用せず、あくまで身の回りにあるものを利用して表現し、繰り返して発音し、また新しい表現を作りだすことを繰り返すことで、生徒も慣れて来て表現の幅も広がっていきました。また、その都度理解度を

確認して、よくわからない生徒には集中的に取り組む時間を与えていました。また、理解を図る確認テストを最後に実施して、行って以上の点数に満たない場合は課題を与えて、再度テストを実施すると言うことでした。指導法としてはシンプルである一方で、理解度や能力に対する配慮はしっかりなされていて、躓きに対しては徹底的に支援する姿勢が見てとれました。

（３）異なる英語使用環境

説明から発問、評価まで全て英語で行われていました。もちろん、生徒もしっかりと英語で受け答えすることが出来ます。英語教育が小学校低学年からすでに始まっており、身の周りでも英語が第 2 言語として普通に使われる環境であることを考えると、納得が出来ます。ペナン日本人学校の同学年の生徒でも、学校外でも日常的イに英語を使用している生徒と、そうでない生徒では英語力に大きな違いがあるのは、まさに英語を聴き取り、英語を読み、英語を使って何かを伝える必要性と時間があるためだろうと改めて実感しました。

３　おわりに

この機会にペナン島で体験させていただけたことは、自分にとって非常に貴重なものとなりました。約 7000km はなれたペナンと北海道では様々な違いがありましたが、そこに生きる人々が大切にしなければならないものに違いはないと思います。現地での体験と一言に言うと、良い事もそうでないものも様々にありますが、自分が体験した事物というよりも、そこで自分が考えたり、感じたりしたことが一番の宝であると今は思っています。これからどれだけ具体的な形でこれからの教職に還元させていただけるかはまだわかりませんが、どこでも大切にしなければならない考え方やものの見方をこれからの活動で活かせるよう精進していきたいと思います。